古来、日本は舶来ものを上手に自分達の文化として根付かせてきた経緯がある。資源の少ない我が国は、輸入品を加工して逆に輸出するという“加工貿易”が得意であると、学生時代に習ったものだ。さて、ジャズは舶来品である。歴史はこの欧米産の音楽も例外ではないことを証明している。なぜなら日本には、日本ならではのジャズを形作ってきた偉人がいるから……。

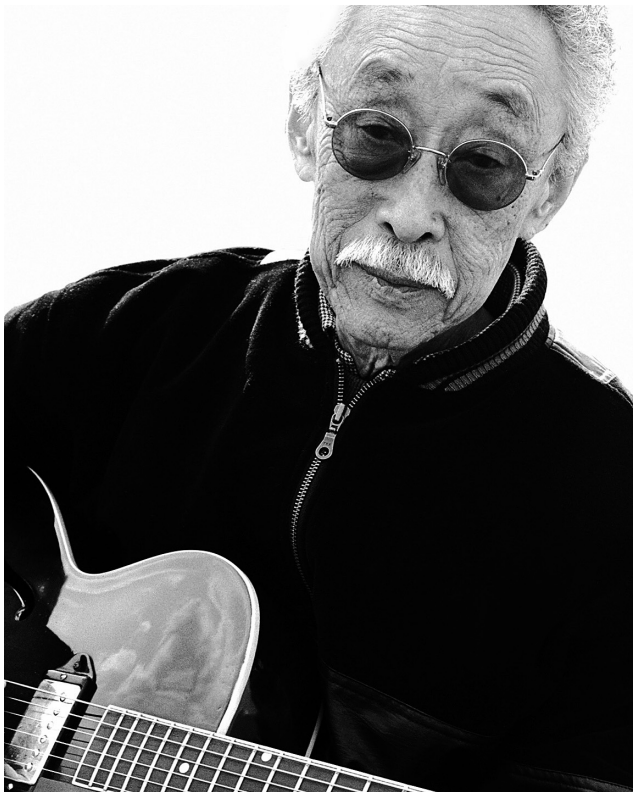
シリーズ第10回

国宝級のミュージシャンズ・ミュージシャン 鈴木康允

Yasunori Suzuki

大和ジャズ・ギタリスト 偉人伝説

文：対馬正徳
Text by Masanori Tsushima
協力：アン・ミュージック・スクール



力まず、飾らず、あるがままに紡ぐ音

遺された2枚のアルバム

ここに2枚のアルバムがある。1枚は'69年録音のアナログ盤『ディサフィナード！』、もう1枚は'03年録音のCD『ラヴ・アンド・リスペクト』。

前者は所謂企画ものボサ・ノヴァ作品だが、実質は鈴木康允とテナー・サックス奏者、西条孝之介によるダブル・リーダー・アルバムだ。ボサ・ノヴァ定番ナンバーが占める中、オリジナルも1曲収められ、各3～4分とコンパクトながら、両者の端正且つアグレッシヴなアドリブも楽しめる内容になっている。

そして『ラヴ・アンド・リスペクト』。「ポンちゃんは私の最も古い日本の友人の1人。初リーダー・アルバムが届いたとは嬉しい限りだ。これほど美しいギター・サウンドは長らく聴いたことがない」……アルバムのリリース時にジム・ホールが寄せた言葉だ。巨匠をここまで言わしめたジャズを演奏した初めてのリーダー作は、ギター・トリオによる編成でスタンダード6曲とオリジナル1曲を収録。しなやかで温かなサウンド、研ぎ澄まされた美しいフレージング……ただ陶然と聴き入るのみである。

これらの2枚のアルバムを残し、今年の3月30日に他界した鈴木“ポンちゃん”康允。この孤高のジャズ・ギタリストの足跡を辿ってみたい。

学生バンドからプロ入り

'29年（昭和4年）に東京の高輪に生まれたポンちゃんのギターとの出会い。それは明治学院の旧制中学4年生（今でいう高校1年生）の頃、遊び仲間とよく通ったビリヤード場での出来事だった。「弦と指板の間が1cmもあるようなギターでね。みんな音を出そうとするんだけど、誰も押さえられない。どれどれって試してみたら、Gのコードが鳴っちゃった。それでギターに向いてるって言われて、その気になって……」。

以降、ギターの魅力に魅せられ、ハワイアン・バンドに加入。やがて進駐軍のキャンプで演奏するようになる。米軍キャンプに

▲桜井センリのトリオに在籍中のショット。

は幾つものクラブがあり、ちょっと演奏出来ればいくらでも仕事があった時代だった。

幾つかのバンドを転々とするうちに、いつしかジャズをプレイするようになる。ハワイアンとは違い、ソロを弾くのが面白くて、どんどんジャズに傾倒していく。「大学に上がった頃、慶應や早稲田の学生とバンドを結成したのですが、そのうちプロのバンドから声が掛かり、3ヶ月間、九州に演奏旅行へ。当時の大卒の月給が1万円そこそこの時代に3万5千円ももらえたので、そのままプロとしてやっていくことにして、学校は辞めました」。

ツアーから東京に戻り、当時ピアノの名手として知られていた桜井センリに声を掛けられたときは感激したという。その桜井とトリオを組み、東京のナイト・クラブ“コスモポリタン”で、毎日明け方まで演奏する日々が続く。

28歳でフランキー堺とシティ・スリッカーズへ加入。しかし、本格的なモダン・ジャズを目指すポンちゃんは、和製スパイク・ジョーンズ・スタイル（当時、一世を風靡したコミカルなジャズ）を志向するようになったスリッカーズを脱退。「入れ替わりで入った植木等のことは、前からよく知っていました。歌って踊れて譜面にも強い、お客さんを飽きさせないよう常に機転が利く人でした」。その植木等が、のちに谷啓と共にハナ肇とキューバン・キャッツに引き抜かれ、あのクレージー・キャッツへと発展するのである。

盟友ジム・ホールとの出会い

ビ・バップ～モダン・ジャズが入り始めた'50年代、ジャズ喫茶等でレコードを聴いて勉強したミュージシャンは数多い。リアル・タイムでバップやクール・ジャズと出会い、自らのスタイルを洗練させていったポンちゃんもまたその1人だった。「ディジー・ガレスピーやスタン・ゲッツと一緒にやっていたジミー・レイニーが気に入って、しばらくずっと追い掛けていました。新作が出ればいち早く聴いてフレーズの研究をしたものです。教則本も何もない時代でしたから、ラジオを聴いたり、ジャズ喫茶へ行ってその場で楽譜に起こして研究しました。ギターも、銀座のヤマハに輸入された最初のギブソンの数本の中から、ES-125というモデルを買い、嬉しくて家で眺めては惚れ惚れとしたものです」。

'60年代に入ると、トリオでの活動が多くなっていく。「店にピアノがあるといろんなピアニストが遊びにきて、弾きたい放題やっていく。いつしか決まり切ったサウンドになっていることに気付いて、ピアノのないトリオにこだわろうと思った。ピアノのある店なら『ピアノを外に運び出してくれないと出ない！』くらいわがままも言いました」。

▲ジム・ホール3度目の来日時（'76年）。

自身のリーダー・トリオで“白亜館”というクラブで演奏していた頃、'67年にハービー・マン、バーニー・ケッセル、ソニー・シャーロックらと来日したジム・ホールとの運命的な出会いがあった。その来日公演を聴きに行ったときのことである。「渡辺貞夫さんがゲストで出て、凄いセッションになりました。ハービー・マンのフルート、貞夫さんのアルトで凄いソロをやったあと、バーニー・ケッセルのギターがホーンのようにブロウするアドリブで応える。で、ジム・ホールにソロが回った瞬間、あくまで少ない音数でクールに歌わせるジムのアドリブに場内は静まり返ったのです。帰りに一緒のタクシーに乗った貞夫さんも『ジムは上手いな、やられちゃったよ』ってベタ褒めでしたよ」。

▲初めてのギブソンES-125を手にする若き日の鈴木。

後日、ジム・ホールがバーニー・ケッセルらと白亜館を訪れ、渡辺貞夫の紹介もあり2人は初めての対面。そのとき、「ジミー・レイニーみたいにプレイする日本人がいる！」とジムは驚いたという。

その翌日、ジムは1人で再びポンちゃんの演奏を聴きにきて数曲プレイしていった。お互いをリスペクトしあう友情が、このとき芽生えたのである。「ジムが1人で来てくれたときは感激しましたね。'70年にギター・フェスティヴァル（厚生年金会館で行われたケニー・バレル、アッティラ・ゾラーとの競演コンサート）で来日したときは一緒に食事をしたりしました。言葉が通じないから、英語の出来るピアノの八木（正夫）さんのところに連れて行ったのですが、その途中、ジムは辞書片手に懸命に日本語で話してくれました」。

以来、2人の友情は終生続き、後年水戸で再会したとき、ジムはポンちゃんの自宅を訪問している。「ジムはよくよく僕のことをしゃべってるんだね。日本のミュージシャンが行くと、すぐ『You Know Ponchan?"』って言うらしいよ（笑）。ヘレン・メリルが日本に来たとき、レコーディングをしてくれたり……」。このエピソードからも盟友・ジム・ホールとの親密な交流の一端が窺える。

第一線を退き後進を指導

結婚してジャズ・ギタリストとして最も脂の乗っていた41歳の頃、ポンちゃんはなぜか東京での音楽活動を辞めてしまう。「結婚してしばらくは東京で暮らしていたのです

◀教え子の１人で、現在関西で活動中の小嶋利勝とのデュオ。

が、子供が出来ると、東京は子供を育てるところじゃないなと感じ始めたのです。ジム・ホールに何度も聴きに来てもらったから、もういいかなと決心して、妻の実家のあるひたちなか市に移り住みました」。

川も海も近く、趣味の釣りを存分に楽しめる茨城県ひたちなか市に移ったものの、ジャズとの関わりを断ち切ったわけではない。ジャズ・ギター講師としての顔も持っているポンちゃんは、前述の渡辺貞夫が持ち帰ったバークリー理論を菊池雅章、佐藤允彦から学び、それをギターの実技でも教えやすいように練り直した手書きの理論書によって、多くのギタリストを育成してきた。「あくまで耳で聴いて学ぶことが一番大事。でも耳で付いていけない部分がある。ラジオ、レコードによってジャズの魅力に取り憑かれた私は、理論的な知識がないまま演奏活動を続けて、約15年後に初めてバークリー理論に出会い、理論の裏付けを得て自信に繋がった。理論を学ぶことで自信を持って音を出せるようになる」。

また、茨城での地元ミュージシャンとのライヴ活動も継続して行い、それを聞き付けた東京のミュージシャンが共演しようと茨城に押し寄せた。中でも中牟礼貞則とは20代の頃から交流が深く、ポンちゃんのホームグラウンドである“ひたちなかサムシング”等で何度か共演が実現している。

『ラヴ・アンド・リスペクト』とその後

ポンちゃんが講師を務めていた音楽学校のサマー・セミナーでのエピソード。いわば新入生のための夏合宿の最終日の夜に講師によるライヴがあるのだが、金髪長髪のロッカー達がポンちゃんのトリオ（藍沢栄治：b、池永一美：ds）のサウンドを聴いたとたん、言葉もなく静聴したという。その後を受けて登場した故鈴木“コルゲン”宏昌が、「今のポンちゃんの演奏は人間国宝級のジャズだからね」とざわつく場内を一喝するという場面があった。

そのコルゲンさんがいつも口にしていたのが、「このままじゃ、日本の音楽は本当に死んでしまう。ポンちゃんを何とかしてやって欲しい」という言葉。その言葉が心の奥に引っ掛かっていたあるスタッフが、ポンちゃんのアルバムを作るために奔走し、74歳にしてようやく真のリーダー作がリリースされた。

リリース前の同年１月11、12日には2ndリーダー作のためのライヴ・レコーディング（'09年７月21日リリース予定）や、テレビ出演等のプロモーション活動もあったが、地元中心のマイペースな活動を取り戻し、それを'07年まで継続していた。「新しい人達の音楽も聴いてるよ。ギターだとジョン・アバークロンビー、ジョン・スコフィールド、アダム・ロジャース、ジェシ・ヴァン・ルーラー……音楽の好みにも段階があって、まず『凄いなぁ』、次に『上手いなぁ』で、最後は『いいなぁ』なんだ。例えばキース・ジャレットのトリオみたいな『いいなぁ』と思える音楽をやっていきたい」。

沢山の人に囲まれ、愛されて旅立って行ったポンちゃん……飾らず、力まず、ただ大切な音だけを紡いでいく……そのプレイ・スタイルは彼自身の温かな人柄そのものだった。

▲教室で指導中の鈴木。

▲鈴木が終生愛用していたGibson ES-175D（'61～'62年製）。21回も重ね塗りした塗装や、フレットの打ち[illegible]擦り合わせ、ネックのリシェイプなど、自身で大幅なカスタマイズを施している。ブリッジはABR-1にナイロン・サドルがお気に入りだったが、４～６弦をブラスにしたり、エボニーをABR-1用のサドルに削り出して試したりと、常に試行錯誤していたようだ。

鈴木康允を堪能する3枚

『ディサフィナード！』
鈴木康允カルテット・
フィーチャリング西条孝之介
（ソニー）SONP-50192-J（LP）

『ラヴ・アンド・リスペクト』
鈴木“ポンちゃん”康允
（ACS）ACSJ-60001

『未定』
鈴木“ポンちゃん”康允
（？？）????（７月21日発売予定）

※鈴木“ポンちゃん”康允のCD『ラヴ・アンド・リスペクト』を抽選で10名様にプレゼントいたします。詳しくはP.130をご覧ください。（提供：アン・ミュージック・スクール）